

# JFTP NEWS

Japan's Friendship Ties Programs



箱根湯本でホストファミリーの鈴木家と再会したフィーさん(右から2人目)▶

## The Bond with a Host Family



～ 手紙がつないだ絆 18年ぶり、ホストファミリーとの再会 ～

JENESYS 2008参加者 フィー・ミン・ファムさん

【JFTP PRESS】

カケハシ同窓生クリストファー・シェーンさん 主演声優の映画がエミー賞受賞

カケハシ・プロジェクト 10周年記念誌「MY KAKEHASHI STORY」

2026  
05

ISSUE  
21  
No.

# 手紙がつないだ絆 18年ぶり、ホストファミリーとの再会

## 2008年度 JENESYS同窓生 フィー・ミン・ファムさん



2026年1月、JENESYS同窓生のフィー・ミン・ファム (Huy Minh Pham) さんが18年ぶりに日本のホストファミリー・鈴木家と再会しました。2008年度のJENESYSプログラム以来、手紙で交流を続けてきたフィーさんと鈴木家。

現在は米国に住み、コンテンツクリエイターとして活躍するフィーさんは「やっと日本の家族と再会できて、とてもうれしい」と喜びを語ってくれました。



1. ホームステイで日本文化を体験したフィーさん(左)、右は恒成さんの弟の慧真(けいしん)さん。今回は都合がつかず再会できなかったが、フィーさんはまた会う日を心待ちにしている
2. JENESYS参加当時のフィーさん(右)と鈴木家の皆さん
3. 箱根湯本でホストファミリーの鈴木家と再会したフィーさん(右から2人目)



### 特別な絆が生まれたホームステイ

ベトナム出身のフィーさんは、英語プログラムがある高校で学び、海外への強い憧れを持っていました。JENESYSの参加者に選ばれて来日したのは、2008年12月のこと。当時17歳のフィーさんにとって、初めての海外でした。

静岡県西伊豆町に住む鈴木家にとっても、外国の学生をホームステイで受け入れるのは初めてのことでした。フィーさんは日本語がわからず言葉の壁はあったものの、こたつに大きな紙を広げて絵を描きながらお互いの国のことを紹介し合うなど、創意工夫に満ちた交流の時間を過ごしました。

息子の恒成(こうせい)さんは、フィーさんと同い年。家にあった漫画「NARUTO」に出てくる「写輪眼」はどういう意味かとフィーさんに尋ねられ、「一生懸命に英語で説明した。当時は学校の英語の勉強が好きではなかったけれど、なんとかコミュニケーションできるという自信がついた」と振り返ります。

2泊という短い滞在にも関わらず、別れ際には全員が涙を流したといいます。フィーさんは「なぜ泣いているのか自分でもわからなかったけれど、私たちの間に深い絆が生まれたことは確かでした」と語ります。

### 手書きの手紙で続いたやりとり

フィーさんは帰国後もホストファミリーとの連絡を絶やしませんでした。JENESYSの2か月後に米国に移り住みましたが、年に1~2回手書きの手紙で近況を報告し続けました。鈴木家からの手紙には「いつでも日本に来てください」という温かいメッセージがあり、フィーさんは受け取った手紙を全て大切に保管しています。「メールなどの現代的な通信手段ではなく、伝統的で温かみのある『手紙』だったからこそ、私たちの関係はこれほど長く続いたのかもしれない」と、つながりを保てた理由に思いを巡らせます。

また、2011年の東日本大震災のとき、フィーさんは鈴木家を心配して国際電話をかけました。「ニュースを見て、唯一の日本の知り合いである皆さんが心配でした」。ホストマザーの芳江さんは英語での返答に苦労しながらも、その心遣いにうれしく思い「私たちは大丈夫」と伝えたといいます。

その後フィーさんは鈴木家のもとを訪れようとしたのですが、そのときはビザの関係で来日がかないませんでした。2024年にアメリカ市民権を取得したことで、ビザなしで日本を訪問できるようになりました。

## 地方で教科書を超えた異文化理解を

2026年1月、フィーさんと鈴木家は神奈川県箱根湯本で18年ぶりに再会しました。今は実家を離れて暮らす恒成さんも駆け付け、思い出話に花を咲かせました。現在、小学校教員として働く恒成さんは、JENESYSのホームステイを受け入れたことで海外に興味を持つようになったといい、「タイに旅行したときに露店のおじさんと値引き交渉をした。高校生のときに拙い英語でも話す度胸がついたおかげ。いつかフィーが住んでいるアメリカや故郷のベトナムにも行ってみたい」と話します。

ホストファザーの秀輝さんは、教育関係の仕事に長年携わってきました。「西伊豆のような地方の町では、外国人との接点が限られている。英語が話せないからとホームステイの受け入れに消極的になる人も多いけれど、受け入れてみるとなんとかなる」と自身の経験を話し、「今はスマホなどで翻訳もできるし、同じ屋根の下で過ごすことで教科書では学べない異文化理解にもつながる」とホームステイを受け入れる意義を語ります。

## 本物の日本体験が一生のつながりに

フィーさんは現在コンテンツクリエイターとして世界を旅して、その経験をSNSで発信しています。そうした旅の中でも「有名な観光地ではない、小さな町の体験は特別」と話します。「例えば東京では英語を話す人が多く、周りが私の行動に合わせてくれる。一方、鈴木家の皆さんは英語が流暢ではないけれど、とても日本的な態度で接してくれる。そうした『本物の日本』を体験させてもらったこと、そして本当の息子のように優しくしてくれたことにとっても感謝している」と語りました。

今回の再会の旅では、箱根の大涌谷などを観光した後、鈴木家に2泊滞在しました。その様子を、フィーさんは自身のYouTubeチャンネルで配信をしています。動画には、再会したホストファミリーと過ごす穏やかなひと時や、高校生のときに訪れた場所と同じ場所で写真を撮り、当時と現在を比較する場面も収められています。

仕事のため今回は1日しか一緒にいられなかった恒成さんは「今度は一緒に富士山に登ろう」とフィーさんと約束しました。国を超えた絆は、これからもさらに続いていくことでしょう。



18年前と同じ場所で写真撮影

フィーさんが制作したYouTube動画  
「18年ぶり、日本のホストファミリーとの再会」

<https://youtu.be/MPyYAI9nHnk?si=0NjsAUMtz4qzT5xQ>



すぐに見る



ホストファミリー鈴木家お母さんと  
富士山をバックに記念写真



## 主演声優の映画がエミー賞3部門受賞 クリストファー・シェーンさん (2025年度カケハシ参加者)

2025年度カケハシ・プロジェクト参加者で俳優のクリストファー・シェーン(Christopher Sean)さんが主人公の英語版声優を務めたCGアニメ映画『Ultraman: Rising』が、2026年3月に第4回チルドレン&ファミリー・エミー賞を受賞しました。日本にルーツを持つクリストファーさんに、主演作品と日米の架け橋としての想いを伺いました。



©TSUBURAYA PROD.  
『Ultraman: Rising』公式ビジュアル



▲エミー賞授賞式のクリストファーさん  
出典:クリストファーさんInstagram  
(@mrchristophersean)

### ■ アイデンティティとの闘い

母が日本人、父がアメリカ人のクリストファーさんは、幼少期に母の故郷である神奈川県湯河原町をよく訪れたといいます。「子供の頃にウルトラマンをテレビで観ていました。あんなに有名な日本のヒーローを、将来自分が演じるとは思ってもいませんでした」。その背景には、アイデンティティへの葛藤がありました。「私は半分しか日本人じゃない。アジア人を演じるにはアジア人らしさが足りないし、白人を演じるには白人らしさが足りない」と語り、「俳優として20年以上の道のりは、決して平坦ではありませんでした」と振り返ります。

### ■ 物語と自分自身の共鳴

『Ultraman: Rising』は円谷プロダクションとNetflixが共同製作し、2024年から全世界で配信中のCGアニメ映画です。主人公サトウ・ケンは、野球のスター選手として米国で活躍していましたが、ウルトラマンとして地球を守るため日本に帰国します。「アメリカでは日本人と区別され、日本では外国人と言われる。私自身がこれまで経験してきたことと、ケンのストーリーは同じだと感じました。演じるのではなく、過去をもう一度生きる感覚でした」。



▲クリストファーさん(前列左)が参加した日系米国人若手リーダー招へいの様子

### ■ 日米の架け橋として

クリストファーさんは2025年12月、カケハシ・プロジェクトの日系米国人若手リーダー招へいに参加しました。「外務省の方が『おかえりなさい』と声をかけてくれて、ミックスの日本人としてアメリカで苦勞してきた話を打ち明けると、『話してくれてありがとう』と言ってくれた。ずっと求めてきた日本人としての承認を、やっと得られた瞬間でした」。

帰国後は翌年2月にロサンゼルスで開かれた対面同窓会にも参加し、「同窓生の皆が日本の良さと日米同盟の認知度を高めたいという思いを持っている。尊敬できる人たちと、このコミュニティをどのように大きくできるか話し合えて、とても充実した時間でした」と語ります。

### ■ 次世代を励ますロールモデルに

『Ultraman: Rising』は第4回チルドレン&ファミリー・エミー賞アニメーション部門で最優秀作品賞など3部門を受賞。同窓会の翌日、クリストファーさんはエミー賞の授賞式に出席し、「ヒーローになる資格のある全ての子供たちへ、そして日米同盟に感謝します」とスピーチしました。その言葉には「日本人とアメリカ人の両親、カケハシ・プロジェクト、日米でこの作品を支えてくれた全ての人への感謝」が込められていたといいます。「ハリウッドにはAAPI(アジア・太平洋諸島系アメリカ人)の主演級俳優が足りない。似たような境遇にいる誰かを励ませる、ポジティブなロールモデルになりたいです」と力を込めました。

### カケハシ・プロジェクト 10周年記念誌

#### 「MY KAKEHASHI STORY」

2015年度に始まったカケハシ・プロジェクトはこのたび10周年を迎えました。この大きな節目を記念し、当センター国際交流部はデジタル記念誌「MY KAKEHASHI STORY」を発行しました。本事業の関係者や同窓生のうち、102名の方々がエッセイを寄せてくださいました。右リンクより、ぜひご一読ください。▶ <https://www.jice.org/exchange/info/2026/03/my-kakehashi-story-10.html>



一般財団法人日本国際協力センター(JICE)は、主に日本国政府や地方自治体、企業からの依頼に応じ、世界各国の社会開発課題に資する人材育成のお手伝いや日本についての理解を促進する事業を展開しています。

JFTP News 第21号 2026年5月29日発行

編集・発行：一般財団法人日本国際協力センター(JICE)国際交流部  
EMAIL: kokusaikoryu@jice.org

JICEについて詳細はHPをご覧ください。  
<https://www.jice.org>

●本誌掲載の記事、写真などの無断転載を禁じます。  
©2026 JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION CENTER

